

琉球大学学術リポジトリ

豚の飼養管理

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮城, 悦生, Miyagi, Etsuo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21293



豚の飼養管理

豚は古くから飼育されている家畜であり、その飼育は比較的容易であるが、実際において豚の栄養、生理に順応し、経済的に所期の成果をあげることはむずかしく、相当の熟練と研究を必要とする。

豚は氏より育てが大切であるといわれており、いかに遺伝的に優れ、体形、資質が優良な豚であっても、その飼養法が悪ければ、その成果をあげることはできない。その能力を十分に発揮させ経済性を高めるためには、合理的な飼養法によって

はじめてなしうるものである。すなわち、豚の終局の目的はいうまでもなく肉であるが、その飼養目的には、子畜生産の繁殖と肉生産の肥育とがあり、その目的によって飼養法も区別しなければならない。その区別をしない場合は、それぞれの能力を発揮しないばかりでなく、養豚経営上、多くの損害を招来するものである。なお繁殖用にあつては、育成期、妊娠期、哺乳期に細別して、それぞれに適した飼養法を講ずべきである。

I 繁殖雌豚の育成

1. 育成の要訣

一般農家における繁殖雌豚の育成方法は、肉豚として飼育したものの中から発育が速で、体形のよいものを繁殖用として選定している場合が多いが、このような育成方法では、よい子豚をより多く生産することは困難である。

よい子豚をより多く生産するためには、やはり繁殖用は子豚の時からはっきり区別して、それに応じた飼養法をおこなうべきである。すなわち、繁殖用子豚は育成の時から肉豚よりも蛋白質を多給し、無機物、ビタミンなどの給与にも留意するとともに、飼料を多給しすぎて肥満にならないように注意し、飼養標準に合致した飼料給与をおこない、運動を十分にさせ、まず、胴伸びがよく、がっちりした骨格をつくるのが肝要である。いわゆる中肉程度に育成し、栄養の充実をはかり、肥満をさげなくてはならない。

一般に肥満した雌豚は次のような繁殖障害をおこすものである。

(1)、卵巣および卵管の生理作用を阻害する。すなわち、卵巣機能が減退し、発情微弱で受胎率も悪く、産子数も減少する。

(2)、子宮および産道が圧迫され、死産、流産あるいは難産の原因となる。

(3)、乳腺の発達に妨げられ、したがって、泌乳

量が減少したり、あるいは停止することもある。

(4)、肥満した雌豚は体重が重いので起居が不自由となり、房内で子豚を踏んだり、圧死させることが多い。

以上のことから繁殖雌豚は、肥満をさげなくてはならない。ひとたび過肥におちいせると、その後給与飼料を減らし、運動を課して、やせさせても、皮下脂肪は減退するが、内部生殖器周辺に沈着した脂肪は容易に減少しない。したがって、繁殖雌豚の育成の要訣は中肉で胴伸びのよい豚をつくることである。

2. 育成豚の発育

第1表 種豚の発育標準(kg)

種別	月令	生後 2ヵ月	3	4	5	6
中型種(Y.B)		12—17	20—25	30—35	40—50	55—65
大型種(L.W)		15—25	30—40	45—55	60—70	80—90
1代雑種 (Y.L.B.L)		15—20	25—30	35—45	50—60	70—80
種別	月令	生後 7ヵ月	8	9	10	完熟体重
中型種(Y.B)		70—80	85—95	100—110	115—125	200—250
大型種(L.W)		100—110	115—125	130—140	145—155	250—300
1代雑種 (Y.L.B.L)		85—90	100—110	115—125	130—140	230—270

繁殖雌豚の体格は体長と胸囲の比率

胸囲—85—90%が適当である。

体長

胸囲が体長と同じかそれ以上の場合には肥満したもので、繁殖用のタイプとはいえない。

Y—中ヨークシャー B—パークシャー
L—ランドレース W—大ヨークシャー

Y L—ランドレースと中ヨークシャーのF₁

B L—ランドレースとパークシャーのF₁

体長—両耳間中央部より尾根部までの長さ

繁殖雌は短期間にあまり発育を促進させると、脂肪太りになり、前述のような繁殖障害を起し、不成績に終ることが多いので、一応標準に合致した発育をさせることが肝要である。その目安について示せば第1表のとおりである。

3. 飼料の給与量と配合

給与量：飼料の給与量は配合飼料や糠類のような乾燥飼料を、離乳直後体重の約5%（日量）からはじめ、徐々にその率を下げて、繁殖供用開始前には体重の2.5%位与えると適当であるが、その量は品種や発育度によって多少異なり、ランドレース、大ヨークシャーなどの大型種は、特に育成期において採食量が多いので、従来の中型種（パークシャー等）より10~20%飼料給与量を増加することが望ましい。大型種の飼料給与量とその栄養価は第2表のとおりである。

第2表 大型種(ランドレース、大ヨークシャー) 育成飼料給与基準

月令	標準体重	飼料給与量			飼料の栄養価	
		kg	kg	kg	D.C.P	T.D.N
生後2	15—25	0.8—1.0	0.2—0.3			
3	30—40	1.2—1.5	0.3—0.4	12—14	70—72	
4	45—55	1.7—2.0	0.4—0.5			
5	60—70	2.2—2.5	0.5—0.6			
6	80—90	2.5—2.8	0.6—0.8	10—12	68—70	
7	100—110	2.8—3.0	0.8—1.0			
8	115—125	3.0—3.2	1.0—1.2			
9	130—140	3.2—3.3	1.2	9—10	67—70	
10	145—155	3.3—3.5	1.2			

D. C. P—可消化粗蛋白質

T. D. N—可消化養分総量

配合：いかにすぐれた飼料でも、そのものの単味では栄養上完全でないので、なるべく数多くの種類を配合した方がよい。

飼料はその含有栄養素によって、いも類、穀類などの澱粉質飼料とフスマ、米ヌカなどの糟糠類飼料および大豆粕、魚粕、脱脂粉乳などの蛋白質飼料に分けられる。実際に飼料の配合にあたっては、これらの質の異なる飼料を適当に組合せて第2表に示されている栄養価を満たすように配合し、それにカルシウム剤（コロイカルなど）2%位、食塩0.5%添加する。またその他微量栄養素

第3表 育成豚の飼料配合割合

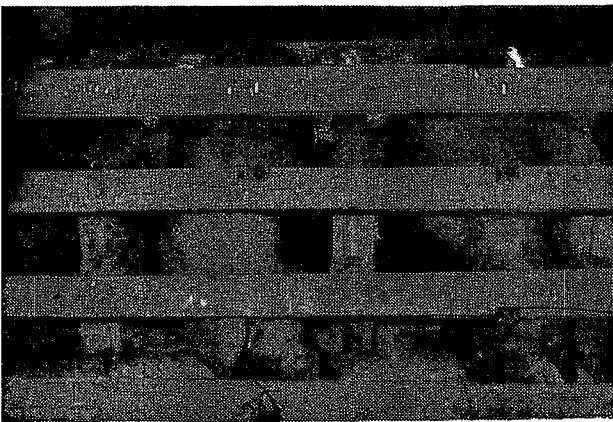
飼料	月令		
	3—4カ月	5—8カ月	9—10カ月
トウモロコシ	35%	35%	35%
マイロ	17	17.2	17.2
フスマ	25	25	25
大豆粕	8	6	4
アルファルファ(乾)	6	10	13
魚粕	6	4	3
カルシウム剤(コロイカル)	2	2	2
食塩	0.5	0.5	0.5
ビタミン剤	0.4	0.3	0.3
抗生物質	0.1	—	—

(ビタミン・ミネラル) 補給のために、青草類を十分に与える。育成豚用飼料配合例を第3表に示す。

いもを配合する場合には、トウモロコシ、マイロの代りに乾物比で生後3~4カ月30~40%、5~8カ月40~50%、9カ月以降は45~55%用いたらよい。生いもを使用する場合は重量でその3倍を与える。例えば、生後3カ月の豚でいも30%使用するとして、100kgの飼料を配合するならば、いもは30kg必要とするが、生いもはその3倍の90kgを与える。

4. 管理

離乳前後の飼育はその豚の一生を左右する場合が多いので、その飼育管理には慎重を期さなければならぬ。特に飼料給与には注意すべきであり、離乳後1カ月位は市販の子豚用配合飼料を用いた方がよい。なぜならば、自家配合ではとかく蛋白質の不足、無機物などの添加不十分なため種々の欠陥をまねき、発育をおくらせるおそれがあるが、市販の完全配合飼料は高蛋白、高カロリー飼料を配合し、無機物、ビタミン類も十分に添加されており、さらに下痢を予防し、発育を促進する抗生物質飼料添加剤が加えられているので、発育もよく、労力的にも容易である。若干経済的には負担はかかるが、事故も少なく、簡便であるので、離乳直後の育成飼料は信用ある市販の完全配合飼料を用いた方が安全である。日常の管理にも細心の注意を払い、特に離乳直後の子豚は雨にあてたり、どろんこにしたり、あるいは寒い時期に冷えたりすると下痢をおこしやすいので、常に身体を乾かしておくことが大切である。寒い時期に



繁殖豚の開放式群飼々育における飼料給与

は豚房は敷草を十分に入れて房内を暖かくするようにする。また、排糞の状態に注意し、異状を見したら、その原因を調べて早急に治療する。

なお、豚舎には運動場を付設し、自由に運動させる。運動させることによって、筋骨の発達をはかることのはかに太陽光線に当ってビタミンDの効力を強くし、土を喰うことによって鉄分を補給するなど栄養上の意義が大きい。特にランドレース、大ヨークシャーなどの大型種は広い運動場で放し飼いで十分運動させるようにする。

5. 繁殖供用適令期

一般に豚は生後4～5カ月、おそくとも6～7カ月には発情をみるが、排卵をとともなる発情は生後7カ月以上で、体重75kg以上になってからであり、この時期から繁殖に用いることができるが、実際に繁殖に用い始める時期は、体の発育との関係や、繁殖供用後の影響なども考慮しなければならない。あまり早く繁殖に用いると次のような欠陥がある。

- (イ)、排卵数が少なく、したがって産子数も少ない
- (ロ)、一般に生産される子豚は小さく、発育も芳しくなく、大小不揃いの場合が多い。
- (ハ)、妊娠や授乳によって母体の発育が阻害されるので使用年限も短くなる。

逆にあまり長期間種付しないでおくことは、不経済であるばかりでなく、脂肪太りとなり、繁殖成績は不良になる場合が多い。

豚の繁殖供用適令期は第4表のとおりであり、繁殖供用時期の目安は中型種で生後10カ月で体重

第4表 豚の繁殖供用開始適期

種 別	月 令	体 重	
		方月	kg
中 型 種 (Y. B)	9—10	125	(120—125)
大 型 種 (L. W)	8—9	135	(130—145)
1代雑種 (Y. L. B. L)	8—9	130	(120—140)

125kg、大型種は生後9カ月で135kgとし、おそくとも10～12カ月には種付しなければならない。

II 妊娠豚の飼養管理

妊娠中の飼養はきわめて大切で、この適否は母体そのものの健康と、生れてくる子豚の健康、発育にも大きな影響をおよぼすものであるから、母豚個体や時季により適宜手心を加え合理的に飼養しなければならない。

母豚は妊娠中において胎児の発育と分娩後子豚への哺乳のための準備をしており、その栄養分は胎児の発育に要するよりも、母体自身に貯え、分娩後子豚への哺乳に備えるための栄養分の量が多いといわれており、その栄養分の蓄積量の良否が分娩後の子豚の発育におよぼす影響は大である母豚の妊娠中における増体についてどの程度がよいかは、その母豚の年令、交配時の栄養状態によって異なるが、少なくとも分娩および哺乳によって失われるだけの体重は妊娠中に増加させておく必要があり、体重を約60kg (40～80kg) 増体させて繁殖させることが望ましい。

1. 妊娠豚の飼料

受胎を確認したならば (一般に種付後3週間経過して発情がないならば受胎したものとみる) 逐次、栄養の増殖を図らねばならない。栄養の増進を図ることは、すなわち、胎児の発育および分娩後の子豚への哺乳をよくするためであり、それに必要な栄養分を十分に与えることが大切である。

飼料配合: 給与飼料はなるべく多くの種類を配合するようにし、偏食単味の飼料に陥らぬように注意する。特に蛋白質および無機物、ビタミン (特にA, D) などの微量栄養素が不足しないように注意しなければならない。

蛋白質は、胎児と子宮の発育、分娩後の乳腺の活動、いわゆる、泌乳作用に最も重要な栄養素であり、その蓄積は妊娠の月令が進むにつれて増大するといわれているので、妊娠後期には十分与える。また、良質の蛋白質を与える意味において、動物性蛋白質飼料 (魚粕、肉粉、脱脂粉乳) を10%程度配合することが望ましい。

妊娠中は蛋白質ばかりでなく、身体のエネーギー源として、消化のよい良質の澱粉質飼料、特に

第5表 繁殖豚に対する飼料基準

体 重 別	妊 娠 前 期	妊 娠 後 期	子 付 母 豚	摘 要	
150 ~ 180 kg	2.4 ~ 2.6 kg	3.0 ~ 3.2 kg	4.5 ~ 6.0 kg	子付母豚は下記の様に時期別に加減する	
180 ~ 200	2.6 ~ 2.8	3.2 ~ 3.5		分 娩	
200 ~ 250	2.8 ~ 3.0	3.3 ~ 3.7		第1日 1 ~ 1.5 kg	5 ~ 10日 4.55.5 kg
250 ~ 300	3.0 ~ 3.2	3.5 ~ 4.0		2 2.0	11~30 5.5~6.5
給与飼料	D.C.P	10 ~ 12 %	11 ~ 13 %	3 2.5~3.0	31~45 4.5~5.5
〃 栄養価	T.D.N	66 ~ 70	70 ~ 72	4 3.0~4.0	46~60 3.5~4.5
青草(生) 給与量		1 ~ 2 kg	2 ~ 4 kg		

妊娠後期には蛋白質と同様、蓄積量が増大するので十分に与える。

無機物としては、特にカルシウムが重要であり、その蓄積は妊娠後期よりも前期に多いといわれているので、前期に多く与えるようにする。

しかし、普通の穀類飼料には含有量が少ないので、一般に不足しやすいから骨粉あるいは市販のカルシウム剤を混合して補給しなければならない。カルシウムはその消化吸收において特殊の作用があり、給与量が不足すると体内に蓄積されるどころか、かえって、マイナスとなり、母体の骨が消耗され健康を害するばかりでなく、胎児の発育もいちじるしく不良となる。したがって、カルシウムの補給のために炭酸カルシウム（市販のコロイカル、ナーリンなど）を2~3%添加する。

また、食塩は生理上重要であるが比較的不足しやすいので0.5%位添加する。

ビタミンの補給としては、ビタミン含有量の高いアルファルファミールなどを十分に与えるようにする。（アメリカでは15~20%位配合されている）しかし、ビタミン中最も重要なAは、長期保存すると酸化してその効力を失うので、できれば多汗質の消化のよい青物類を常に1~2kg位与えることが望ましい。

総体的に飼料の配合に当っては、第5表に示された栄養価を含有するように配合するが、飼料は消化のよい種類を選び、便秘をおこしやすい飼料は用いないようにする。

飼料給与量：妊娠中に胎児の発育ならびに分娩後の哺乳に伴う体重の減少などに備えて、約60kg（40~80kg）の増体がなされるので、飼料の給与

量は第5表のとおり与えるとよい。すなわち、妊娠中は維持飼料に対し、初産の場合は30~40%増し、2産以降は20~30%増しとする。なお、妊娠後期はできるだけ1日3回に分けて与え、分娩直前になって食欲が衰えた場合にはそれに応じて減量する

2. 管 理

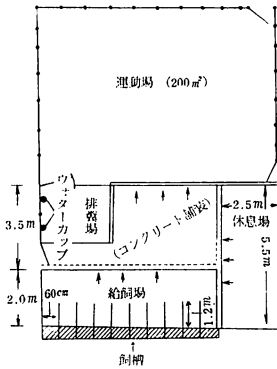
最近、繁殖豚も肉豚と同様省力化による群飼が次第に多くなっており、その目的は生産の増大とともに管理労力、その他の諸経費の節減のためである。しかし、その反面群飼による事故が往々にしてみられる。そのうちで最も多い事故は流産でややもすると生産の低下を招くおそれがあるが、その主な原因は、妊娠豚同志のけんか特に飼料給与時の飼料のうばいあいによるけんかが多いのであるから、施設の改善を図りけんかをさせないようにする。また事故の防止、管理の便をはかるために、1群の豚はできるだけ妊期の同じものを収容することである。すなわち、妊期の異なるものを混同して収容すると、飼料の給与、その他の管理および豚房の利用において支障をきたすとともに事故の発生率も高くなる。

なお、豚舎にはかならず運動場を付設し、晴天の日には運動場に放飼して、日光照射につとめるとともに十分運動をさせ、体軀の充実をはかることが必要である。特にランドレースは肢蹄が弱いので重要である。

群飼豚舎（開放式豚舎）の平面図設計例を第1図に示す。

飼料の給与に当っては、腐敗した飼料、寒冷期の冷えた飼料は与えないようにする。

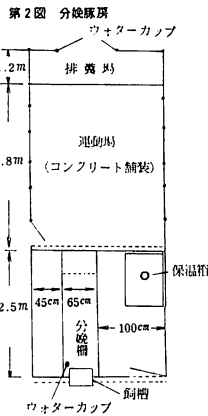
第1図 開放式豚舎 (10頭用)



分娩2～3週前に予防注射，駆虫を済ませ，1週間前に分娩豚房に移す。

また，最も手数のかかる分娩時には，分娩豚房に分娩柵，保温箱を設置して，新生子豚の圧死防止とともに保温を十分におこない，早く体を乾かして活力を旺盛にし，労力の省力化をはかる。

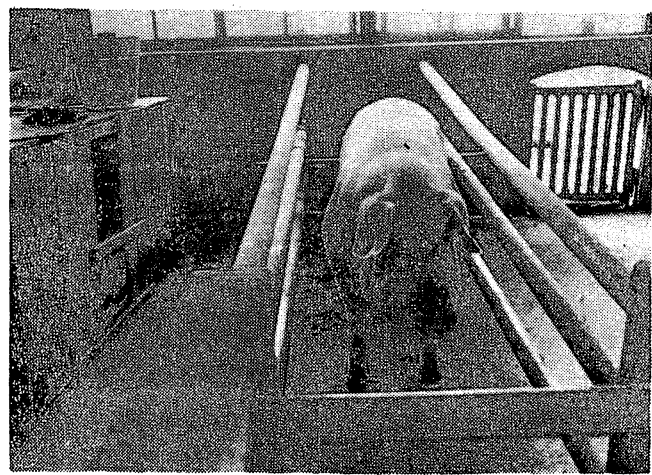
なお，繁殖豚を群飼する場合には前述のとおり1週間前に，分娩豚房に移動すればよいから，分娩豚房は雌豚の35%位の数があればよい。分娩豚房平面図設計例を第2図に示す。



Ⅲ 哺乳時の飼養管理

1. 哺育頭数の決定

哺育頭数は母豚の栄養状態，体重，母豚の乳頭数，泌乳能力，子豚の生時体重を勘案して決めることが望ましい。子豚の頭数が母豚の哺乳能力にくらべて多すぎると，子豚の発育は悪く，母豚は衰弱し，離乳後の発情がおくれ，次の種付に支障をきたす。従来から母豚の体重18～20kgあたり



分娩柵の中の母豚と新生子豚を保温する保温箱(写真中左方の木箱)

1頭が哺育頭数決定の目安とされているが，体重だけでなく，栄養状態や泌乳能力などによって決定されなければならない。一般に1腹の子豚頭数が少ない程，発育，哺育率は良好であり，多くなるにしたがって，母豚哺育の能力が低くなるとともに圧死などによる事故が多くなり，発育および哺育率は低下するものである。しかし，最近では分娩柵，保温施設の普及ならびに子豚飼料，母豚飼料の質的向上によって，哺乳中の子豚の発育，および哺育率も従来に比較して向上しておるので，1腹の哺育頭数は初産8～10頭，経産頭では10～12頭を目安とし，具体的には母豚の状態によって判断すべきである。

2. 母豚の飼養管理

子付母豚に対しては，D.C.P 11～13%，T.D.N 70～72%を含有するように配合し，その他にカルシウム剤2～3%，食塩0.5%，ビタミン，ミネラル剤を少量添加した飼料を日量で4.5～6kg給与する。しかし，分娩直後2～3日間は母豚は弱っているため，急に濃厚飼料を多く与えようと加えて，乳があがってしまう場合もあるので，最初はフスマなどをぬるま湯にとかしてスープ状にしたものを少量与え，3～4日頃から第5表のとおり徐々に濃厚飼料を増し，分娩後30日をすぎたら，徐々に減量して離乳に備え，5～6週頃に離乳する。

飼料の配合に際してはなるべく，多種類の飼料を配合し，動物性蛋白質飼料を5%以上配合する。なお，カルシウム，食塩，その他のミネラル，ビタミンなども不足しないように考慮する。特に青草は十分(日量2kg以上)与えるようにする。青草類を給与することは，微量栄養素の補給とともに乳汁の分泌を促進し，乳質の改善をはかり，子豚の発育を促進する。

第6表 繁殖豚の飼料配合例

品名	妊娠豚	子付母豚
トウモロコシ	45%	47%
フスマ	25	25
大豆粕	4	10
アルファルファミール	15	10
魚粕	8	5
カルシウム剤	2.5	2.5
食塩	0.5	0.5

また、いも類を配合する場合には、その他の飼料はトウモロコシ、糠類、大豆粕、魚粉などのような飼料（軟らかい脂肪をつくる）を適宜配合する。なぜならば、イモ類の澱粉からつくられる母乳中の脂肪は硬いので、往々にして子豚が消化不良のため、白色の下痢便（子豚白痢）をすることがある。

第7表 人工乳給与量

生後日令	人工乳A	人工乳B
21～25日	150～200g	g
26～30	250～100	100～200
31～35		300～400
36～40		400～500

生後日令	人工乳B	子豚用配合
41～45日	500～600g	g
46～50	600～700	
51～55	500～400	200～400
56～60	400～500	400～800

3. 哺乳中の子豚の飼養管理

(イ)、哺乳中の子豚の死因の殆んどが（約80%）圧死であるが、これは分娩直後の子豚の肢が弱いためであるので、分娩豚房には、第2図に示したような分娩柵を設置し、事前に分娩柵に入れて圧死の防止をはかる。

(ロ)、子豚は寒さには弱いから分娩豚房には赤外線電球などを利用した保温箱（室温25°C内外）を設置し、寒い時期は、少なくとも生後3週間位までは保温すべきである。

(ハ)、子豚は上下左右に各々2本計8本の乳歯（狼歯）があり、（特にランドレースは強大で長く尖端が鋭い）哺乳の際、乳頭をうばいあいして、母豚の乳頭を傷つけたり、同腹子豚の耳、顔ある

いは体表を傷つける。そのため母豚は授乳をいやがり、子豚は傷の炎症のため活力が弱くなり発育もおくれる。したがって、生後2～3日以内にこの乳歯をできるだけ根元から鉗子やペンチなどで切除してやることが是非必要である。

また、乳歯の切除と同時に、貧血予防のために鉄剤の注射をおこなうようにする。特にランドレースは発育が速いので、母乳中の鉄分だけでは不足するといわれているので、是非、鉄剤の注射を励行すべきである。なお、生後2～3週頃に再び注射をおこなうとより効果的である。

(ニ)、分娩後1週間程して、母子ともに元気になったら、天気の良い日には、なるべく運動場に出して自由に運動させる。

(ホ)、子豚は生後2～3週間もすれば母豚の飼料をなめるようになるので、その時期から餌付をする。最近母豚の生産力の増大をはかるため、子豚の離乳時期が早くなっているのなるべく早めに餌にならすようにする。飼料は多少経済的には負担であるが、発育がよく、安全で取扱いが容易な、信用ある市販の子豚用人工乳を用いる方がよい。

4. 離乳の時期と方法

1) 時期

子豚の離乳時期は生後5～6週で体重10kg程度になり、糞がバナナ状になってからが適当である。それ以前に離乳すると、(イ)、子豚が病気に対する抵抗力が弱いので哺育に手間がかかる。(ロ)、母豚の泌乳能力は分娩後3～4週が最高であり、離乳の際に乳房炎にかかりやすい。また母豚の乳を有効に利用することができない。すなわち、泌乳量の多い時期には子豚に十分哺乳させるようにした方がよい。しかし、あまり長期間子豚をつけると母体の消耗が激しく、次の種付、妊娠に影響をおよぼす。

2) 方法

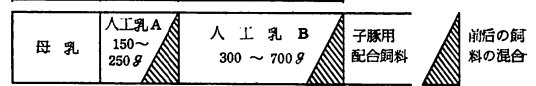
子豚は生後2～3週頃から餌付して餌にならし、離乳予定日1週間程前から、昼間は母豚から離して飼料のみを与え、離乳飼料ならびに離乳後の環境にならす。

母豚は離乳予定日3～4日前から飼料を50～70%に減量し、さらに乳房の乾きぐあいによっては

離乳後も減量して乳房炎の発生を予防する。もし乳房炎をおこした場合は濃厚飼料を減らし、青草類を多く与えるとともにペニシリン、その他の抗生物質などの経口投与、筋肉注射および患部を湿布して治療する。

子豚の飼料の給与量、方法は第7表および第3図のとおりであり、子豚の発育標準は第8表のとおりである。なお、生後60日迄の哺育期間中の飼

第3図 子豚に対するエサの与え方
生時 3週 30日 60日



料消費量および飼料費について琉球畜産試験場が調査しました成績を第9表に示します。

第8表 哺乳子豚の発育標準

品種別	生後日今							
	生時	10日	20日	30日	40日	50日	60日	
中型種 (Y. B)	1.2 ^{kg}	2.5~3.0 ^{kg}	4.0~4.5 ^{kg}	6.0~6.5 ^{kg}	8.0~9.0 ^{kg}	10.5~12.5	13.0~15.0 ^{kg}	
大型種 (L W)	1.5	3.5	5.5~6.0	8.0~9.0	11.0~12.5	14.0~16.0	18.0~20.0	
1代種 (Y L. B L)	1.4	3.0	5.0	7.0~8.0	9.5~11.0	12.0~14.0	15.0~18.0	

第9表 哺乳子豚の飼料消費量

品 種	子豚頭数	飼 粉 消 費 量					飼 料 費		飼 粉 要 求 率
		人工乳A	人工乳B	育成用	合計	1頭当り	総額	1頭当り	
ハンブシャー	22	40.48 ^{kg}	264.10 ^{kg}	32.60 ^{kg}	337.18 ^{kg}	15.33 ^{kg}	\$ 60.33	\$ 2.75	1.95
大ヨークシャー	35	49.50	383.74	88.10	526.34	15.04	91.39	2.62	2.13
ランドレース	26	34.71	322.28	58.40	415.39	15.98	72.88	2.80	1.86
三元交雑種 WL・H	27	44.51	378.40	20.30	443.21	16.41	80.59	2.99	1.91
〃 LW・H	24	23.25	321.60	50.50	395.35	16.47	68.58	2.88	2.01
平 均						15.80		2.81	1.98

註 40日離乳で60日迄哺育 60日 平均体重 16.90~17.00kg

第10表 各品種の能力

品 種	産子数	90kg日令	飼料要求率	背脂肪の厚さ	背 腰 長	胸腰椎数	枝肉歩留	
							本	%
ランドレース	10~13	150~170	3.0~3.5	2.0~2.3 ^{cm}	78~81 ^{cm}	22	73~75	
チェスター	8~10	180~210	3.5~4.0	2.3~2.8	70 75	21	70 73	
中ヨークシャー	10~12	200~230	3.3~4.0	.12~2.6	73~78	21	70~73	

注① 大ヨークシャーはランドレースとほぼ同じ。

② ハンプシャーはチェスターとランドレースの中間で、産子数は10~12頭、チェスターよりも背脂肪はうすく、全脂肪量もすくない。

③ パークシャーは中ヨークシャーとほぼ同じであるが産子数は8~9頭、脂肪も稍々多い。

IV 肉豚の肥育

1. もと豚の選定

肉豚の肥育は「もと豚」の導入から始まるが、その「もと豚」の選定が最も大切である。すなわち、いかに設備を完全にし、管理に細心の注意を払っても、導入した「もと豚」の品質が悪けれ

ば、確実な収益をあげることは困難である。それ故、「もと豚」の導入に当っては、次のことを十分に検討して導入する。

1) , 地域の要求する肉を生産し、且つ能力の高い品種を選ぶ。

豚を用途別に大別すると、ラードタイプ(脂肪を外く生産する品種)とベーコンタイプ(脂肪が少なく赤肉を多く生産する品種)とに分けられる

が、どのタイプの品種を選ぶかは、その地域の食肉の嗜好によって判定すべきである。

最近、沖縄における食肉の嗜好性は、従来の脂肪質の肉から赤肉へと変わっており、そのためラードタイプの豚は敬遠され、ベーコンタイプの豚がよろこばれておる。

また、赤肉を多く生産するとともに発育が速で飼料の利用性の高い品種を選ぶことが大切であり、そのためには品種の特徴を知ることが必要であるので、主な品種の能力を第10表に示す。

第10表から各品種の能力を検討すると、

(イ)、発育速度(90kgに達する日令)はランドレース、大ヨークシャーなどの大型種が速い。

(ロ)、飼料の利用性もランドレース、大ヨークシャーなどの大型種が飼料要求率(飼料要求率=飼料摂取量/増体重、1kg増体するために消費した飼料の重量で表わす。この数値が低い程飼料の利用性はよい。)が低い。

(ハ)、赤肉の生産は、一般に椎骨数(またはアラ骨)が多く、胴伸びがよく、中軀後軀がよく発達し、枝肉の歩留が高く、背脂肪のうすい品種がすぐれている。

以上のことから「もと豚」はランドレース、大ヨークシャーなどの大型種を導入することが望ましい。

第11表 肉豚飼料の種類別割合

飼料 体 重	澱粉 質 類		ぬか類	蛋白質 類 (大豆、魚粉等)
	穀 類	イモ類		
kg	%	%	%	%
20~40	10~15	40~50	20~25	20
40~70	10~15	40~50	30~35	10~15
70~90	10~15	50~55	30~35	5~10

注① その他にカルシウム類を全飼料の1~2%食塩0.5%添加する。

② 青物る十分に給与すること(特に小さい時期)

2)、品種の特徴をよく表わし、発育のよい子豚を選ぶ。

一般に肉用子豚は繁殖用子豚と違って、豚であればよいと考えがちであるが、これは大きな誤りであって、十分にその系統、外貌などを検討して選ぶべきである。

子豚を選ぶに当たっては、まず、その品種の特徴をよく表わしているものを選ぶべきである。特徴がよく表われている子豚は一般に能力が高いとい

われている。大型種の特徴として体は総体的にのびのびとし、体軀は頭、頸、肩、などの前軀が軽く、中軀、後軀がよく発達しているのがよい。

次に同腹の子豚頭数が多く、順調に斉一の発育をしているものの中から、食欲旺盛で、元気があり、剽悍なものを選ぶ。また導入子豚の体重は、その後の発育に影響をおよぼすので、導入を急ぐことなく適当な体重で飼料の食いこみが十分な子豚を選ぶことが大切である。大型種は生後60~70日位のもので、食いこみよく、体重20kg程度のものがよい。なお導入に際して注意すべきことは、必ず、豚コレラ、豚丹毒の予防注射を移動2週間前までにすませたものを導入する。

2. 肥育の方法

肥育の目的は筋肉(赤肉)に適度の脂肪をつけ肉質をよくし、肉の歩留や経済価値を高めることである。すなわち筋骨の発達をはかり、良質な脂肪を適度に沈着させることである。

1) 運動

豚の肥育は生長の途中の筋骨の増大と脂肪の改善であるから、あらかじめ体重40~60kgぐらいまでは十分運動させるか、ゆとりのある豚房で飼育して筋骨の発達をはかり、その後運動を制限して体重90kgぐらいまで肥育して筋間に適度の脂肪を沈着して肉質をよくする。

2) 飼 料

配合方法：日本における肉豚の飼養標準はD.C

第12表 肉豚飼料の給与量

前 期				後 期			
体 重		飼料給与量 (風乾物)		体 重		飼料給与量 (風乾物)	
以 上	未 満	中ヨーク シャー	ランド レース	以 上	未 満	中ヨーク シャー	ランド レース
kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg
20	22	1.0	1.2	50	53	2.1	2.4
22	24	1.1	1.3	53	56	2.2	2.5
24	26	1.2	1.4	56	59	2.3	2.6
26	29	1.3	1.5	59	62	2.4	2.7
29	32	1.4	1.6	62	65	2.5	2.8
32	35	1.5	1.7	65	68	2.6	2.9
35	38	1.6	1.8	68	71	2.7	3.0
38	41	1.7	1.9	71	76	2.8	3.1
41	44	1.8	2.0	76	81	2.9	3.2
44	47	1.9	2.1	81	86	3.0	3.3
47	50	2.0	2.2	86	90	3.1	3.4

第13表 各品種の月別体重 (単位kg)

品 種	月 令	生 時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
ランドレース		1.4	8	18	35	50	70	90	110	130	150	165
チェスター		1.3	7	15	26.5	45	58	73.5	93.5	109	124	143
中ヨークシャー		1.2	7.5	15	23	35	65	65	80	95	110	125

PとT.D.Nで示されているのが多い。一般に体重20~40kg迄はD.C.P12%内外, T.D.N, 72%内外, 40~70kgはD.C.P11%内外, T.D.N 71%内外, 70~90kgはD.C.P 9~10%, T.D.N 70%位であるので, 飼料の配合の際は各時期の示された栄養価を含むように配合すればよい。しかし, 一般農家で計算することは困難かと思われるので, 簡単で且つ上記に近い配合をするためには, 第11表の比率で配合するとよい。

給与量: 飼料の給与量は大体, 体重20~40kgは体重1/20, 40~70kgは1/25, 70~90kgは1/30が適当である。日本の産肉能力検定飼料の給与

基準は第12表のとおりで, 1日朝夕2回に分けて与える。

しかし, 農家で体重測定が困難な場合は, 第13表に示されている肥育豚の発育標準から, その豚の月令と栄養状態を勘案して体重を推定し, 上記の体重の比率により給与量を算出する。しかし, いずれにしても, 実際に飼料の給与に当たっては, 豚の食いこみ状態をよく観察して, 適正な量を判断することが望ましい。

肉質と飼料の種類: 肉の質や風味のよしあしは, 主として脂肪の品質によって左右され, その脂肪の品質は与える飼料によってちがう。このように飼料と肉質および脂肪の間には密接な関係がある。すなわち, 脂肪が純白で弾力性のあるものが, 一般に肉質はよいとされている。それ故, 肥育用飼料としては良質の脂肪をつくる飼料を与えることが大切である。飼料の種類と肉質は第14表のとおりである。

以上のことから, よい肉豚を生産するための肥育用飼料の給与は, 体重が30~40kgぐらいになるまでの発育期には, 魚粕や大豆粕のような蛋白質飼料やフスマなど豚の嗜好に適する飼料を多く与えて発育を促進し, 発育が進むにつれて, 次第に蛋白質飼料を減らし, 良質の脂肪をつくる穀類やイモ類などの澱粉質飼料を多く与える。

また, 飼料はどんな栄養価に富んだものでも単味で完全なものはないので, 必ず各種類の飼料を配合して, 豚の要求する栄養分を十分に与えるようにする。できれば5種類位配合することが望ましい。

飼料配合例として, 琉球畜産試験の肥育試験用飼料の配合割合を第15表に示します。

(表紙写真は人工乳による早期離乳子豚とタイヤ一利用の子豚用給食餌器 子豚は伸々とした発育を示している)

(宮城 悦生)

第14表 飼料と肉質

肉 質	蛋白質類	ぬか類	澱粉質類
上	脱脂粉乳 バター ミルク 牛乳 棉実粕 コブラ ミール	フスマ 麦糠	甘藷 馬鈴薯 澱粉粕 大麦 小麦 碎米 カボチャ キグイモ
中	大豆 大豆粕 豆腐粕 魚粕 (油を含まないもの)	脱脂米糠 米糠	トウモロコシ 粟 ヒエ ア麦 粕 ビール粕 燐肥粕
下	蚕蛹粕 ナタネ粕 アマニ粕 落花生 粕 醤油粕		

第15表 飼料配合割合

飼 料 名	前 朝	後 期
イ モ (乾)	26%	31%
フ ス マ	13	14
ト ウ モ ロ コ シ	36.5	37.6
アルファルファミール	3	3
大 豆 粕	12	8
魚 粉	7	4
カル シ ム 剤	1.5	1.5
食 塩	0.5	0.5
ビ タ ミ ン 剤	0.4	0.4
抗 生 物 質	0.1	—